

鴻 鸞 禧

張 愛 玲

(徐 青 記)

鴻鸞禧・解説：ここに訳出した「鴻鸞禧」という短編は、張愛玲が1943年に出版した『伝奇』と題する作品集の中の一編です。台湾人研究者、唐文標の『張愛玲研究』（聯経出版事業公司、1976年出版、149頁）によれば、この短篇「鴻鸞禧」の初出など出処は、初めて『伝奇』（増訂版）に収録されたのは1947年であるとされ、2001年版『張愛玲評説六十年』（中国華僑出版社、552頁）では、それは1947年11月とあるものの、今なおはっきりとはおりませんでした。当時の台湾の研究者が「咫尺天涯」のごとき大陸へ赴いて資料収集することは、きわめて困難でした。1984年に『張愛玲資料大全集』を出版した唐は、その翌年鼻癌のため亡くなりました。本翻訳は1995年に安徽文芸出版社が出版した『張愛玲文集』に収録されたものを原テキストとしておりますが、2009年に北京出版社出版集団と北京十月文芸出版者聯合で出版した最新版『張愛玲全集』の『赤いバラと白いバラ』の一集では、『伝奇』収録を1946年11月としつつも、この短編の出所初出が1944年6月上海『新車方』第九卷第六期であるとしています。

「鴻鸞禧」というタイトルの意味は、もともと、人生の目出度きこと、大いに喜び溢れる良きことをさしています。しかし、この短編の主人公である玉清の性格は、「終わりのような」、「見たものを全部買う」、「まず、細かいものを買って、最も大事なものを最後で買う」といった張愛玲の描き方からもよく分かるように、それほど単純ではありません。自分自身への支出が舅家の予定している結婚に使う金額を超えることを考えているこの主人公を通じて、結婚という神聖な時、華美な見栄の裏に確かにある、悩みや人生の煩わしさの断片を、張愛玲の筆は見事にスケッチしています。中国語テキスト一万字程度の短編ですが、全体として起承転結のはっきりした構成ではなく、まるで日中戦争期上海の成金官商人家の息子の結婚準備をめぐる人々の生活の一断面が、さっと切り取られたかのような感じに仕上がっています。

「鴻鸞禧」には、日常の細々としたことがらが描かれていますが、張愛玲はそうした「切り貼り」の意匠をととても得意としています。本来腐っていくものを神奇に溶かし、ひとつのごく平凡な日常の物語を、悠然と南山を人に見せるかのように描いているのです。華麗かつ深遂なパースペクティブ（透視角度）が実に効果的な、美しき小篇であるといえましょう。（徐青記）

娑家の姉妹、一人は名を二喬といい、もう一人は四美という。姉妹二人は『祥雲』というブティックで注文した服を試着しにいった。明後日は、彼女たちの大哥（第一番目の兄のこと）の結婚式で、姉妹二人は新婦の介添えをすることになっているのだ。

「新婦は来ています？」二喬は店員に聞いた。

「ええ、いらしてますよ。奥の小部屋にいらっしゃいます」と店員は応えた。

四美は二喬を引っ張って言った。「ねえ、二喬（第二番目の姉）、あちらに掛っている黄色の、斜めにストライプが入った布をご覧になって」。

二喬は、「黄色のチャイナドレスは、もう一枚持っているじゃない！」と言う。

四美は笑いながら、「この機会に乗じて、何枚か多めに服を作ってもらいませんか？

この二日間は、お父さまは、どうしたって、むげに人にあたり散らしたりできませんことよ！」と言った。

二人は、生地のおいているところへ行き、その服地を手で触ったり、揉んだりしてみた。値段を尋ね、色は褪せるのかどうかなどと店員に聞いた。

二喬は自分が履いている靴を見ながら、「この靴じゃいけないわね。後で服を試す時に、丈の長さがわからなくなっちゃうもの」と言った。

四美が、「明後日、どの靴をお履きになるおつもり？」と尋ねると、二喬は、「ああ、あなたと同じあの靴よ。玉清はローヒールを履くべきだわ。彼女は大哥より背が高いし、大哥が低く見られるようなことがあってはいけないもの」と言った。

四美は、「玉清のあのからだは……大哥は、彼女が衣服を脱いだ後の姿を見たことないんだわ、きっと……」と囁いた。二人は一斉にぶっと吹き出してしまった。二喬は、笑いながら、「しっ！しっ！」と言い、振り返ってまわりを見回した。

四美はつづけて、「彼女のからだは本当に硬くて……まるで『地面に落した金と石の音』のよう……」と言った。

二喬は笑いながら、「どこから引っ張ってきた表現？ とてもお上品。——本当ね。一緒に服を試したりしないと、そんな姿だなんて思いもよらないわね。可哀そうな兄さん！ これからの一生は……」と言った。

四美は笑いすぎて腰を曲げてしまった。「触れるだけで、骨はカザザと音がするのね。彼女と一緒にダンスをした時は、多分聞こえなかったのだから。音楽に覆いかぶさって分からなかったのね。まあ、不思議ねえ。痩せているほどでもないのに、なぜ、からだ中、骨だらけなの？」

二喬が、「骨格が大きいのよ」と言うと、四美は、「肌は白いのに、惜しいのは白骨ね！」と言った。二喬は笑いながら彼女を打って、「そこまではないでしょう？……まあ、可哀そうな兄さん！ 彼に教えても、仕方がないわ。もういよいよという瀬戸際なのだから……」と言った。

四美が、「彼女、きっと30歳は超えているわね」というと、二喬は、「兄さんは26歳だと言ったので、彼女も26歳だと言うわね」と言った。四美が、「問い合わせることは容易だけれどねえ。彼女の下にはまだあんなにたくさん弟妹がいるし……、彼女がもし歳を隠していたとして、さらにその下の一人一人も歳をかくしていたとしたら、小さい方は何歳違うとすぐ分かってしまうわね」と言うと、二喬は、手ぶりを交えながら、「一人ひとり減っていくと、まるで、ドミノ牌倒しのように一つが一つにつられて倒れて、パタパタと次々に前の牌を倒していくことになってよ!」と言って、二人は、笑って団になってしまった。

二喬は続けて言った。「一番小さい子は生れたばかりですから、お母さんのお腹の中に縮まって戻ることはできませんね。」

四美は笑って、「明日、私たちの学校の棠情と梨情に聞いてみましょう。玉清の従妹ですから」と言った。二喬が、「あなた、棠情と梨情とを良く知っている?」と尋ねると、四美は、「最近、彼女たちはよくお話しにくるの」と応えた。

二喬は、玉清を指して、「あなたも気をつけましょうね。大哥は玉清を娶りました。私たちの家には、まだ老三（第三番目の兄弟）がいます。もしかしたら、彼女たちを気に入るかもしれないわ! それも無理ないことだわ。私は何も悪口を言うつもりはないの。ただねえ、玉清のどこが私たちの大哥に相応しいといえるの? 玉清のあの親戚たちには、さらに関わってはいけないことよ。みんなさらに貧しいのだから」と言った。

邱玉清は鏡に背を向けて立っている。そして振り返って自分の後ろ姿を見ている。彼女は、二人の小姑がいうように、見ていられないというわけではなかった。少なくとも長い純白のウェディングドレスを着ている彼女はさまになっていた。新聞や広告などに載っている、所謂「高尚な仕女」なのである。二喬、四美と比べ合わせると、まるで成り金のお嬢様であるようなように見える。二喬、四美の父は読書人の出身であるけれども、最近になってようやく「立身出世」したばかりである。娘たちの身体には、まだある種の新鮮な俗っぽさが残っている。彼女たちは玉清にあいさつして、店員を外へ追い出してから、衣服を脱ぎ始めた。そして急いでチャイナドレスを頭から脱いだ。シミーズの奥には、彼女たちの怒っているかのように突き出た乳首が見える。

玉清はスカートを引っ張りながら、「いかがでしょう、何か直すところがありますか?」と尋ねた。二喬は、責任感に充ち溢れたような振る舞い方で、「とても良いですわ!」と言った。玉清は、まだ後ろがあまりにも長すぎるではないかと心配していた。すると、四美が叫んだ。自分の礼服の上半身のシルクと下半身のジョゼットのスカートの二種類のピンクの色が微妙に違うことを発見したのである。

みな各々、明後日結婚式では自分が最も重要な役柄を担うものだと思っている。二喬、四美に対して、玉清はスクリーンの上に映った、あの映画の最後に出る白いまぶしい「完」

なのである。彼女たちは、それぞれに精彩を放っている、次ぎの良い映画の予告編なのである。

店員が入ってきた。二喬、四美は文句を言う。店員は、皆を慰めるようと、こちらを高く引っ張ったり、そちらを平らにしたりして、「何にも間違っはおりません。寸法は全部ここにあります。腰周りは1尺9寸、肩幅は1尺2.5寸。もう一人の方は1尺2寸、間違っはおりません。色が違うとおっしゃるなら、取り換えることもできます。このようにいたします。当店ではある薬を持っていますので、それで上着を洗って、色を褪せさせることが十分でないようでしたら、また下の方を染めることにいたします。できますよ」と言った。

店員は15、6歳の少年で、グレーの愛国布の長袍、白い顔に永遠に浮かんでいるのではないかとも思えるにこやかな微笑みをたたえていて、とても気の長い若者である。彼の口調を聞いていても、この礼服が臨時にこの二人女性に貸し出すものなのだとは誰もけして思わないだろう。一人、真っ直ぐ咲く水仙の花のような靈気を漂わせた少年なのである。大きくなったら、どのような人材になるのか、本当に想像もつかない。

『祥雲公司』の建物は所謂宮殿様式である。赤い泥の壁の上に小さな金龍が突き出ている。小さな部屋の壁には、長い条状の鏡が嵌め込まれている。周りには新婦の写真をいっぱい飾っている。違った顔が、笑いながら同じ貸出礼服の中から頭を出している。朱色の小さい部屋の中には、すべてのものを平等にしてしまう、人性のない喜びの雰囲気がある。

玉清は、湖水緑の石鼓の上に乱れておいてあったチャイナドレスを動かして、石鼓の上に腰を掛けた。身体を前に傾けて、一方の手は頬を支え、憂鬱に、二人の介添を眺めていた。

玉清は、とても気を遣うタイプで、嫁入りのために喜び勇む、自分の楽しい感情をいつもあまり表には出さないようにしている。——彼女はきっとオールドミスになるかのような面持ちである。玉清の顔は広くて平坦である。それは新しく敷いたベットのようである。そこに憂いの重圧が加えられて、まるで、ベットの上に急に坐ったかのような感じがする。

二喬は、玉清に、「買物はもうおしまいですか？」と尋ねた。玉清は眉を顰めて、「そんなことはありません！ 朝から走り回ったけれども、まだまだ！ 最近、ちょっと気に入ったものがあった、みんな値段が高いの。でも、買わなければならないし……。きつと、これからもっと値が上がってしまうでしょうね」と応えた。

二喬は、手を伸ばして、「お買いになった服の生地を見せてくださいな」と言った。玉清は彼女にそれを渡して、「これはシルクに混ざった麻の布ですよ」と言った。

二喬は、紙包みの上に小さい穴を開けて、顔を上に近づいて、まるで、この穴から中のすべてのものを全部吸引してしまうかのように、また、蚊が玉子の上の黄色みを一口で食べてすべてばらばらになったかのように、「そうね、柄は悪くないことよ」と言った。

四美は、「去年、一時的に流行ったことがありましたわ」と言った。二喬は、「でも色は褪せるものですわ。私も一枚もっていますけれど、もう洗って目茶苦茶になってしまっよ」と言った。

玉清の顔は赤くなって、紙包みを奪うように取り返し、「物が違いますよ。同じ柄でも、安いものもありますし、私は丈夫でないものはむしろ買わないの、そういう性分だから」と言った。

玉清は、他に縐子の刺繍のパジャマ、それに合わせた刺繍のあるバスローブ、錦織の真綿入れのバスローブ、金の錦織のスリッパ、金のエナメル（琺瑯）のパウダーファンデーション鏡、ファスナー付きの鶏皮のパウダーファンデーション鏡も買った。彼女は、女の一生で、この時だけはわがままにすることができるのだと思っていた。できるかぎり、彼女はその権利を行使したいである。だから、何か欲しいものを見たらすぐそれを買ってしまう。それも慌てて買うのである。そこには心の中にある亀裂、物哀しい感覚がある。彼女が嫁入り道具を買うときの悲哀は、まったく装いなのではない。

しかし、舅姑の家の人々は、彼女を本当に浪費家だと思っていた。彼女は、自分のお金を使っているにも関わらず、二人の小姑は依然として怒っている。

玉清の家は、没落した大家族である。彼女の両親は、5万円の嫁入り道具を持たせたのだが、今までに、彼女はそのお金を全部自分の為に使ってしまった。二喬、四美、そして三多（あの義理の弟）は、みな陰であれこれ議論をしている。彼らはいろいろなことを人に尋ねた。中国の古い礼に従えば、新居の中の備品、ベット以外のすべての品々は、全部女性の方が買うべきである、外国の風俗は違うが、女性はある程度のお金をもって来る他にも、新居でつかうすべてのタオル、テーブル・クロス、ナプキン、シーツを用意しなければならない……。いずれにせよ、新法にしても、旧法にしても、玉清の無責任はよろしくない。舅と姑は損をしても、何にも言わないが、間接的に損をした小姑と義理の弟は、そのように修養ができていないわけではないのだ。

二喬と四美とは、玉清が新しく買ったものを点検した。彼女たちは切実な損害を感じただけではない。純粹に、局外の人の立場から見ても、このような馬鹿な女性が、このように金を浪費することができるのを見ると、金を使うことのできない無限の痛みと金を惜しむ気持ちがこみ上げてくるのである。

とはいえ、二人は依然として微笑んではいる。二喬は笑って、「式が終わった後に、あの薔薇色のチャイナドレスに合わせる靴はございますこと？」と尋ねた。

玉清は、「言わなかったかしら？ めんどくさいのよね、このドレスに合う色を選ぶのはとても難しいの。たくさんの靴屋へ行ったのだけれど、刺繍の靴は、真赤か、ピンクか、棗赤しかないのですもの」と言った。

四美は、「もう、買わなくてもよろしいわ。お母さまが、お姉さまのためにドレスに合

う靴を作っていますのよ。靴がどうしても見つからないとお聞きになったからですわ」と言った。

玉清は、「あぁ、それは、それは——でも、どうしたら式に間に合うのかしら？」と言った。

四美は、「お母さまは、あの性格ですもの。いくら緊急ことがあっても、そしらぬ顔をして、靴をつくってしまうのですわ！ この二日間、家にはたくさんの用事がありますのに！」と言った。

「はずかしい——お母さまがやって来ると、人に恥ずかしい思いをさせるのだわ。よその人の前では、お母さまを弁護しなければいけないわ」と考えて、二喬は、「家に縫物をする女中がいますから、間に合わせるために彼女に一足作って貰うことは可能ですけれど、たとえ、上手く作れなくとも、お母さまの性格では、ご自身でなされないと気がすまないのですわ」と言った。

玉清は、本来自分はそのお母さまの気持ちに感動すべきなのであるかと思いつつも、とはいえ困ったように、何回も、「本当に申し訳ないわ……本当に…」と言った。するとすぐに、慌てて服を着替え、一人先に店を出た。そして、疲れてしまった髪をたらし、美容院に行った。巻き毛に雨の日の疲れを感じた。——明後日は雨が降らないでほしいわ、と思った。

妾夫人は、嫁の花靴を楽しみながら作っている。なぜなら、2、30年の練習を積み重ねてきたけれども、目の前の生活に関わるすべてのことが彼女には全然できないからだ。靴の表を張り、花模様を描くなどということは、嫁に出る前までの日課である。子どもの頃の思い出の中に逃げ込む機会は、実に愉快なことである。実際、靴を作らせても、彼女は上手くないのだが、現代の人々はあまり拘らず、そこまで注意してはいない。たとえば、粗い縫い目でくつの先が歪んでいたりしたら、きっと姉妹たちに、歯が抜けるほど笑われるにちがいない。

靴を作るときには、いつものように眉をよせながら、顔全体が不満そうな表情となる。まるで、一家全員の破綻を見抜いたかのようなのである。彼女がその中からある種の愉快を得たことを知って、皆彼女に嫉妬するのだ。

彼女の夫である妾輩伯が銀行から帰ってくるのは、いつも遅かった。帰ってきたら、急いで女中が風呂にお湯を入れる。それを待ちながら、先にスリッパを履き替え、ソファーに凭れて、古い『老爺』雑誌をめくって休憩する。

アメリカ人は本当に広告が上手だ。車の上に、永遠に小さく気持ちのよさそうな白雲が軽く浮かんでいる。「フォー・ローゼイズ」ブランドのウィスキー、きらきらして透明な黄酒、そして、同じようにきらきらして透明なクリスタルグラスが、シュロの黄色がきらきらひかって、テーブルの上に置かれている。テーブルのそばにはいくつか赤いバラの花

が散りばめられている。——一杯の酒ですらあんなに典雅で雰囲気がある。鬮伯は手を伸ばして、ソファの脇の丸テーブルの上にある茶碗をとった。その丸テーブルのガラスの下には、一枚の薔薇色の靴の表が挟まれている。平金（緞子の上に金糸銀糸をちりばめた刺繍の一種）の花弁は、明りに照らされてキラキラしている。彼の書と富は突如として一体のものになったと思えた。精華の趣きをもった読書人の志をそこに得たものである。

鬮伯はアメリカで学位を得た、最も地道な部類の読書人である。彼がその後の志を得たことと、彼の十年の読書とは、実はまるで関係がない。

もう一枚のバラ色の靴の表は、まだ妻夫人の手の中にある。鬮伯は、それを見ると我慢できなくなって、「こんなに忙しい中、どこにそんなことをやっている暇があるのかね！

もういいかげん止めにしたらどうだ？」と言った。彼は夫人を見るたびに、このように、ひと続きで発話してしまう。

「髪をあひるのお尻みたいに切らないでほしいね。便利さのためなら、髪を全部切ってしまう方がいいではないか！ 薄紫色の靴下は履かないようにしてくれたまえ。いいかね？

それから、靴下を膝の下で巻かないでおくれ。チャイナドレスのスリットの中から、黒い浮き出し模様のある絹織物のズボンを出さないでおくれでないか」と言った。

焦ってはいても、依然として相談するかのような口調と仕草で言う。なぜなら、鬮伯は、良い夫として有名だからである。彼のような良い夫でなければ、だれも妻夫人のような女性を媒酌で娶ることはない。

海外留学後帰国してから、夫人は4人の子どもを産んだ。30年がまるで1日であるかのように過ぎ去った。

妻夫人はメガネを掛けていて、「八」の字の眉は寄せられた「人」の字となる。丸い白い顔は、子どもが大人を真似て、肉入り団子を幾重にも揉んで模様がぐちゃぐちゃとなり、手の平にあったほこりも小麦粉に入ってしまったたりしているかのような、比較的複雑な白となっている。

妻鬮伯もメガネをかけている。その丸く白い顔は、彼の夫人とはちょうど反対の性格をもっている。非常に能力のある人で、とても幅広い交際ができる人物である。身長が高く、背広を着ているけれども、人に「長袖でダンスに長じる」と連想させるものがある。彼の接待は、実際、あるダンスを思い出す。観客には眩しく、吐き気がするかのような、脚の爪先を立ててと輪舞する舞踊のようなのである。

妻先生と妻夫人のような間違った組み合わせの夫妻でも、人々はみな妻先生の不平を言う。そうした不平については、妻夫人もむろん知っている。それが怒っている原因でもあり、裏では夫に譲る心があっても、人前では故意に妻先生をいじめることがある。妻先生は彼女を愛しそして怖がっていて、人々が言うような人間ではないことを表わそうとしている。

今も、部屋の中で女中二人が祝儀を包んでいるので我慢していたのだが、妾夫人は主人のある言葉に我慢できず、すぐに顔を黒くして、「私は私の靴を作っているにすぎないのですよ。あなたと何の関係があって？ 余計なことは言わないで」と言った。

鬮伯は、人前では、その以上何にも言わなかった。彼はいつも彼女に三分くらい譲ることにしている。彼女が、何にも根拠もないのにじゃじゃ馬のように名声を宣揚したいのなら、それはそれで彼女の自由であろう。彼はすでにたくさんの犠牲を払ってきている。よい夫を最後までやり通すことだ。

しかし、今日はなぜか忍耐できない。

雑誌の誌面では、素晴らしく華麗な広告と目の前の財富との関係で、たいていは二つに分かれている。雑誌上のことは雑誌上のことであり、家のことは家のことである。彼は、心の中で、夫人に、「そのように馬鹿でいてほしくはないのだがね……」と言いたかった。依然、相談の口調である。

女中が風呂の準備ができたとき主人を呼びに来た。彼は立ち上がり、その拍子に膝の上の雑誌がふっと落ちた。彼はそれを拾おうともしないで部屋を出た。

妾夫人自身、鬮伯が怒っていたことに気がついていて、それもこれもみな、周囲に人がいるからなのだ。彼女は面子を必要とする。それで主人を怒らせた。彼女は、いままでずっと周囲の人の存在を気にしてきたのだ。こころの中は知るべくもないが、もし、周囲に自分たちのことを気にする人々がみな死んでしまっていたら、つまり、隣近所はみな空っぽで、彼女と彼女の夫だけが残っているということであれば、夫は自分に知らん顔をするだろう。責任のある夫のふるまいをだれに見せる必要があるのか？ その意味では、彼女は周囲の人々に感謝すべきであるということをもろん知っている。だからなおのこと、周囲の人々のことをかえって恨む気持ちにもなるのである。

鐘が9時を告げた時、二喬と四美とは自転車に乗って帰って来た。帰ってくる前に、彼女たちの兄の新居に行って、部屋の調度を手伝った。親戚友人たちのお祝いや贈り物も持っていった。ただ、二つのハンカチ花籠は持ち帰った。玉清が、あのチェック柄の麻のハンカチは上品ではないと嫌がっていたからだ。ハンカチ花籠、タオル花籠などは、元々俗っぽいものなのだが、新居は狭いのでそこにおいておけばきっと人々に見られてしまう。

ちょっと話をしていると、また誰かが、二つのハンカチ花籠を送ってきた。妾夫人とふたりの娘は、急いでご祝儀を渡した。妾夫人の、あの平金の靴の表は、まだ手から離れずにいた。一本の糸がぶら下げられ、一本の針が襟元に付けている。

四美はそれを見つけると、突然思い出して、母に、「お母さま、もう靴は作らなくてよいようよ。玉清はもう買えましたわ」と言った。

妾夫人は、聞こえていたのだが、その娘の思い出したような話の中には、愉快的な仕返しのような気持ちが込められていることを察知した。そこで、何にも気にしていないような

表情で、「へえ、買えましたの？」と言いながら、針の穴に通していた糸を外した。そして、その靴口に縁取りが終わっていない靴の表を、テーブルのガラスの下に押し込んだ。

また、それほど親しくはない友人の一人がお祝いを送ってきた。その友人に招待状を未だ出してないことに気づいた。もう一人分招待状を補わなければならない。倭夫人は女中を呼んで、大少爺（第一番目お坊ちゃん）が帰ってきたかどうかを見に行かせた。

女中は、お帰りになってらっしゃいますと言った。倭夫人は、彼を呼び、招待状を書かせた。

大陸は父親より、頭一つ身長が低い、甘く清潔で小さな顔、大きい横に張り出した耳、まるで『白雪姫』の中の唾のようなのだが、話が非常に多い。帰ってくるとじきに清算について話しはじめた。彼自身も非常にびっくりした。小さい家庭を一つつくるのに、こんなにお金がかかるとは思わなかった。友人の家に、二つの部屋を借りたが、床に蠟を塗らなければいけない、風呂の汚れを取り除くには磨き粉が必要で、西向きの窓には、竹の簾が必要、カーテンの外に防空幕も必要だ、その色も、じゅうたんや椅子のカバーの色と衝突してはいけない。ランプの傘や、電灯のシェードが必要、マージャンをするには、その他のテーブルやテーブル・クロス、そして電球が必要になる。玉清はこうした事情は全部承知していた。——二つの部屋に台所、清潔でまじめな生活を送るには、それぞれの部屋に時計も必要である。大陸は、自分の両親のお金を使うのに、心に何の恥らいもない。なぜなら、彼が娶った女性は家柄もある由緒正しい人だからだ。玉清のよいところは、人に高貴な印象をあたえることである。彼女はみなの中にある最も上等な部分を引き出すのである。彼の父の如きは、玉清を見る度に、時局動向について議論をしたくなるくらいである。1時間も2時間も続けて話していることができる。その後、顔を後ろに向けて、このような見聞の広い女性をめったに見たことがないと、みなに玉清を褒めるのである。

この小夫婦は、二人とも見識があって、ものを買う時には、まず、細かいものから買う。重要なものは最後にしておいて、お金が使い終わると、又ごねるのである。——たとえば、ベッドは買わなければならないものでしょう？ といった具合に。

倭夫人は、「この子ったら、本当に計算というものをしないのね！」と叫んでしまう。そして、息子は、自分の心を痛めるのであり、またお金も痛めるものの、心を優しく痛めつけられつつ、「私のベッドをあなたにあげましょう。わたくしはあなたのあの小さいベッドを使えばよいのだから」と言う。すると、二喬、三多と四美は、揃って反対する。「それはよくありませんわ。お母さまのお部屋には元々二台のダブルベッドが並んでおいてあるのに、突然、一つのベッドが、小さなベッドに替わってしまったりしたら……。この二、三日は、お客さまも特に多いし、みなさんから、嫁を娶るために、家がばらばらになっているとでもいわれたら、どうです？ 可笑しいでしょう？ 第一、お父さまにも面子というものがあましてよ。」

そうこう話しているうちに、鬮伯は、バスローブを羽織って、入ってきた。手には、湯気がもうもうとして曇ったメガネを持っている。その足を妻夫人に向けて、「おまえたちは、いつもこうなのだ！ いつも何も考えもせずに、その時になって、滅茶苦茶にものを引っ掻きまわす！ 去年、私は競売に出ていたセットの柚木家具を見て、大陸の結婚の時に使ってはどうかと私が言っても、聞く耳をもっていなかったではないか！」

「あの時には、私はまだ玉清と知り合ってもいませんよ」と大陸は笑い始めた。鬮伯は、彼を睨みつけたが、自分の目力が足りなかったと思い、メガネをかけ直してから、再び彼を睨みつけた。妻夫人は、親子ふたりが喧嘩してしまうのをとても恐れて、急いで、「本当ね！ あの時、買ってあげばよかったのですわ。大陸もいずれ結婚するのですもの、間違いなく買っておくべきでしたわ」と言った。

鬮伯は、顎を前に伸ばして、「何もかも私がしなければならないのに、おまえはいったい何をしているのかね？ 家の子どもの休暇願を書くのも、私がしなければならないのだよ！」と言った。二つのことは、本来なら何の関係もないのだが、鬮伯は、親戚の前で、何回も同じ愚痴を言っていたのを、妻夫人は知っている。妻夫人自身も、自分の夫に窮屈な思いをさせていたとは思っていたので、自分の心の中の不満は、言わずにいた。だが、この時、怒りが急にこみ上げてきて、思わず夫に反論したくなった。「家で寛げないらしいから、あなたは家に帰ってこなくてもよくなってよ！ 外で他の女の人ができたのでしょいうね。家に帰れば、これもダメあれもダメとあら探しばかり！」と口まで出かかったが、飲み込んだ。よく考えてみれば、もうすぐに姑になろうという身なのである。胸を突き出し、腹を出して、ド、ド、ドと大股で浴室に入った。大きな声で口をクァクァクァと漱ぎ、水を喉の中で渦巻くようにまわして嗽し、「ペェ」と吐き出した。妻夫人は、怒って泣き出したい時には、いつも下品な所に逃避する。そうすると急にすべてのことを振り捨ててしまうことができたのである。

浴室の外で、父と息子との二人は話を続けている。

鬮伯は、挑戦な口調で大陸に聞いた。「さきほど、お祝いを送ってきた人はだれかね？ 私の知らない人だね。」

大陸は、「私の勤め先の銀行の職員です」と言った。

鬮伯は驚いて尋ねた。「銀行の人はみな合わせてお祝いを送ってきたはずなのに、なぜまた彼は、改めて表面に立ってお祝いをもってくるのかね？ また彼に招待状を送らなくてはならないわけだ。おまえの飲み友だちなのだろう？」

大陸は、「彼は会計課の馮先生と縁故のある人なのです」と釈明しながら言った。

鬮伯はやっと口調を変えて、大陸と馮先生について、小新聞で馮先生とどのような冗談をしたのかとかといった話をしはじめた。

二人はやはり親子である。

倭夫人は、とても孤独を感じた。倭家の老いも若きもみな全員綺麗で向上心に富んでいる。彼女が愛する人、彼女の夫、彼女の子ども、みな聯合して、時々刻々、いろいろな方法を考えて、彼女をテストしようとする。そして、一回また一回と、彼女の何か足りないところを見つけ出すのである。

彼女の夫は、昔、貧しい時から、面子を重じ、社交がすきで、彼女をいろいろ困った情況下に追いつめることがあった。一回また一回と彼女の何か足りないところを見つけ出した。その後、暮らし向きがとてよくなって、普通であつたら、心に叶うような生活をしているはずなのであるが、思いもよらないことに、生活の場が大きくなればなつたで、彼女はさらに自分の到らなさを見せつけられるのである。

しかし、彼女は、自分がちゃんとした服装をして、客の訪問があつたり、客として訪問したりすることがなかつたなら、それはそれで楽しくない。なにかを失っているかのように感じるのである。繁榮、悩み、困惑といったことがあるのは、生きているからに他ならないのであるが、倭夫人はまた、微かな痛みを感じる。

洗面台の前に立って、鏡に向かい、彼女はかゆみを感じる。何か小さなものがメガネの縁に落ちたようだ。涙だと思い、ハンカチで指先を纏い、メガネの中を拭いてみた。光に飛び込む小さな青い虫であつた。倭夫人はメガネを取って、上瞼を開き、よく調べてみた。小さな虫が眼の中にまで入つたかどうかを疑つたのである。鏡の前に近づき、顔をもうすぐそこで鏡にくっついてしまいそうなくらいになりながら、一片の丸い白い頬をもつた自分を自分で見ていた。そこには表情というものがない。彼女の悲しみは自分自身でも分らないのだ。二本の眉を固く寄せて、それが永遠に寄せ合っているかのように、「めんどくさい！ めんどくさい！」という表情となっている。それは悲しみではない。

倭夫妻は、互いに少し不機嫌になっていたのだが、二日目に、意外なことが起つた。倭夫人は、いつものように囂伯のオフィスに電話をかけ、彼の意見を聞いた。

もともと結婚の証人をお願いしていたのは、退職した交通部部長であつたのだが、官僚を辞めたものの、まだまだ、すべての官僚がそうであるのと同じく、神出鬼没で、何も告げることなく、密かに上海を離れてしまつたのであつた。倭囂伯は、すぐさまその代わりにふさわしい人物を思い出せなかつたが、李という苗字の病院長、とあるちょっとした名士を訪ねてみるようにと言つた。

倭夫人は、雨の中を車で李院長宅へ出掛けた。到着すると、まず傘を開いて、客間のじゅうたんの上に置いた。ブルーの柄のあるセロファンのマントを脱いで、襟の所を持って震えていた。それから、ハンカチを取り出して、皮のコートの表面にある水を拭いた。皮のコートは、ボダンをちゃんと締めていないので、上から下まで開いていて、脚を八の字のようにしながら立っていた。彼女は雨衣を持って、回りを見回したが、雨衣を濡れたままソファの上に置いて、自分も座つた。

李院長は不在であったが、李夫人が接待に出てきた。姜夫人は、「姜囂伯」の名刺を渡して、「囂伯と李院長とはよく知る仲なのございますのよ」と言った。李夫人は廣東人で、僅かな、ガチガチの国語しか話せない。すべてのことについて、あまり、よく理解できないでいたようだった。幸い、姜夫人は囂伯の名声と地位について絶対的な自信を持っていたので、そのまま自然な態度で来訪の目的を説明した。李夫人は、「後ほど、主人に申し伝えます。主人からあなたさまへ電話をさせますわ」と言った。

姜夫人はまた、二缶のお茶を渡した。李夫人は極力それを断ったのだが、姜夫人はどうしても、彼女に受け取ってほしいと強いた。最後には、李夫人はそれを受け取ったが、態度はかえって冷淡になった。姜夫人は、今回もまた何か間違ったことをしたのだろうか、と思った。しかし、30年間無数の失敗をしてきた経験に支えられて、彼女は何も怖がらないようになっていた。そして、そのまま座っていた。

帰るべき時となって、立ち上がり、雨衣を着て、そこで別れを述べた。玄関のところまで来て、傘を部屋の中に忘れたことに気づいた。再び、傘を取りに中へ入ろうとしたところ、李夫人に頭を下げた。まるで「石が下がる」ように重く、ずっしりとしていた。それは、あたかも、みな彼女のお辞儀を絶対に受けることはできないかのようであった。

姜夫人は、こころの中では、とても、慌てていた。玄関に辿りつく前から、はやばやと傘をさしてしまった。ドアから出る時には、傘が邪魔して出れなくなり、また傘をいったん収めなければならず、再び雨で床を濡らしてしまった。

その後、李院長は電話をかけてきた。結婚の証人となることを応諾した。

結婚式の日も、雨は相変わらず降っていた。姜家の人々は、最初、来る客があまりに少なくなるのではないかと心配していたが、それは考えすぎであった。現代の世の中では、予めお祝いを送った人々が、披露宴の食事を食べに来ないことなどけっしてないのである。

午後3時に式は始まった。2時半の時点で、礼拝堂の中にはすでにたくさんの人々が集まっていた。そこでは、自然に2つのグループに分かれていた。婿の家の人々と嫁の家の人々とが、それぞれ一緒にいる。みな微笑んで、騒いで、手足の動作に気を配りつつ、音を立てないように歩いていた。椅子を引っ張り出して座る人もいる。広大なホールの真ん中に、朱紅の大きな柱があり、青い緑の龍を纏っている。壁にある黒ガラスの神佛像の中には、小さな金の佛が座っている。

外国の老夫人のいづく東方は、すべてここにある。その中に、限界のない暗い花模様の北京絨毯がある。上を歩くと、ぼんやりとしていて、花を踏むことはない。何かがか中で隔てている。大きな部屋の全体はまるで「花団錦簇（色とりどりに着飾った華やかな一団）」のガラスボールのようである。ボールの中心に五色の砕けた花くずがある。客たちは、みな言動に慎重で、注意深く、球面にはい上がるハエのように、中に入ることができない。

ガラスボールの外に、手、脚を揉みながら、少し立ってから去ると諦めない二人もいる。

できるだけ方法を考えてあの豪華の中心に入りたいのである。

玉清には5人のいとこがいる。みな、彼女たちの母親についてこの結婚式に来ている。一番目、二番目は、二人とも良い娘である。ただ、歳を取っているので、大分焦っていて、自らの分に安ずることができない。二番目のお嬢様の梨情は、新調の、実に満足できる青いチャイナドレスを作った。だが、思いも寄らないこの二日間の雨で、急に冷え込んだのに、レストランではまだヒーターを付ける季節になっていないため、古いコートを脱ぐことができないでいた。寒さに耐えられないのではない。「寒くはないのですか？」と周囲から問いかけられることに我慢できないのである。

梨情は生まれつき不幸な人である。早めに来たのではあるけれど、なぜか席を見つけることができなかった。彼女は柱に凭れて立っている。——もっとも、彼女はそうした格好も嫌いではない。彼女の青白い疲れた顔が、挑発するかのように、まるで、「私は厭世人。だから私はあなたが嫌いです。——あなたも私を嫌いでしょう？」と意表をつくような雰囲気醸し出している。

彼女の姉、棠情は、彼女ほど背は高くない。そして、顔は彼女より丸いので、ぱっと見ただ目では、彼女は梨情より若い。棠情は活発である。とても活発であるのに、何年経っても、まだ嫁ぐことはできないでいる。彼女はプライドを喪失していた。彼女の丸い小さな靈魂は破裂して、白いエナメルで補ったが、白眼は白いエナメルであり、白い歯も白いエナメルである。少し突き出ている、硬く冷たく、真白で無情である。それでありながら、依然として笑い、更に活発になっていた。

遠くからいとこの兄嫁を見て、彼女は立ち上がり、挨拶をした。そして、兄嫁を呼んできて座らせた。席を兄嫁に譲り、自分は手すりの上に座って、高らかに笑らいながら、指で人を指したり、声をひそめて、入口の所に立っている、あの接待係は新郎の弟であるのかどうか、尋ねていた。後で、委囂伯の銀行の部下であることを知り、興味を失った。

その後、更にたくさんの親戚がやって来た。棠情はその一人ひとりと挨拶をする。とても仲よく手を引っ張り合っている。棠情の笑い声には、まるで歯がついているような感じがする。初めは、冗談のように軽く人を囁んでいるに過ぎないのだが、後になって、痛くて我慢できなくなるような感じなのである。

楽隊が結婚行進曲を演奏し始めた。新郎新婦と男女介添いの輝く行列が、徐々に入場してきた。その一瞬にみな息を飲んだ。期待の中にある善意、詩意の感覚を帯びた、ピンクで淡く黄色い、女介添い人は、夜明けの雲のようであった。黒い礼服の男たちは、まるで彩雲の中にゆっくりと飛んでいる燕の黒影である。半分目を閉じた、白い新婦は、まるで復活の朝であり、未だ目覚めぬ死体のように、収斂した光を帯びている。そうしたすべてが、鳴り響く音楽とともにやって来たのである。

しかし、新郎新婦は立ち留まった後、婚礼立会人が、「みなさん、こんにちは。本日こ

のようにご挨拶できますことを、非常に光栄に存じます……」と挨拶を述べはじめると、空気は急に変化した。婚礼立会人は、旧道徳、新思潮、国民の責任にまで言及した。そして、ご夫婦は努力して小国民を育てていくようにと希望した。みなは、ハハハと笑い始めた。

それから、仲人の挨拶が始まった。仲人は婚礼立会人のように、自分の尊厳を維持する必要はないので、更に事由自在さを発揮した。その中心思想は、ここにいる一人の男と一人の女はもうすぐ寝ることになり、今のうちにできるだけ彼らをよく見ておきましょう、もう少し後には、人々は彼らを見てはなりません、といったものであった。仲人は、直接に彼の中心思想を言語的に表現することができないのを苦しんでいたが、幸いに聞く方の人々は彼が何を言いたいのかよく分かっていた。だから、笑うことも知っている。とはいえ、演説はやはり長すぎた。徐々に、笑う人は少なくなっていった。

楽隊は、再び行進曲を奏ではじめた。新婦が退出する際、白いドレスが古くて破れたかのように、顔色も古くなった。

客たちは、喚声を上げた。赤や緑の紙片を新郎新婦に投げた。後ろの人たちは、前の人たちの身体、頭の全身に紙片をかけることになった。お辞儀をする際、棠情はずっと男の介添である婁三多、すなわち新郎の弟を見ていた。その時、快楽的で野蛮な叫び声を出して、丸々一袋の赤と緑の紙片を彼に投げつけた。

新郎新婦、男性女性それぞれの介添は、写真を撮りにいった。祝い客は、隣の部屋で茶を飲み、菓子を食べた。棠情はとても活発に、梨情は冷漠としてケーキを食べていた。

半分ぐらい食べると、新郎新婦が帰って来た。楽隊は再び音楽を演奏した。新郎新婦がまず先に、ダンスホールに降りて、ダンスをリードし始めた。それは若い人々の世界でもある。ダンスをしない人々も、囲んで見ていた。年をとった夫人たちは、静かに若者たちの後ろで佇んでいた。慎重に微笑みながら、まるで促されるようにしてグループの外へ押し出された。彼女たちにとっては、ある種の消極的な重要性がある。まるで図画の上にきちんとおした判子のようなのだ。その判子が足りないとう等な物ではなくなるのである。

棠情、梨情の姉妹とダンスの相手をするものは誰もいない。棠情は依然笑ってはいるが、口は、口の中にまるで大きな白いエナメルを嵌めたように、開いている。

棠情、梨情は、ちょっと早めに帰ろうかかどうかと考えていた。人々がまだ三々五々と散らないうちに、その場から離れ、注目されて、ひと目ちらっと見られるといった印象を残したいのだった。あの青い服を着た娘は誰？ と聞いてもらいたいのだ。

丁度その場を出ようとした時、彼女たちのテーブルに、あるよく知る夫人がやってきた。彼女たちの母親に文句を言った。「この責任者は誰なのかも知らないのですけれども、私どものあのテーブルは何にもありませんのよ。——普通なら、テーブルごとに誰か責任を持って給仕するようにならなければならないのに、まったく……」。

棠情、梨情たちの母親は急いで、その夫人にお茶を飲ませた。夫人はそこに腰かけ、活発というのでもなく、かといって、冷漠というのでもなく、無感情に大食いし始めた。棠情、梨情は、その夫人への軽蔑を露わに表すこともできないので、ただ母親を急きたてて出ていった。

その時丁度、三多が妾夫人のそばに立っているのを見て、彼女たちは前に出て、妾夫人に別れを告げた。妾夫人は困惑した。まるで新しくメガネを替えた時のように、彼女たちがいったい誰なのかよくわからなかったのである。ようやく誰であるのかに気づくと、ただ眉を寄せて、「なぜもう少しいてくださらないの？」と言った。今日は、妾夫人は忙し過ぎたので、妾夫人は誰憚ることなく堂々と眉を顰めるのだ。

妾家は、はっきりとした新派であるために、夜の宴席は何人かの、最も親しい親戚だけが残ることになった。「隔房（婚礼の晩、親戚や友人が新婚夫婦の部屋に押し掛けて、かからかったり騒いだりする風習）」もしないのである。

翌日、新婚夫婦は家へ戻って来て舅と姑と一緒に昼食をとった。新婦の両親と弟妹もやって来た。撮った写真の見本も持ってきた。

玉清一人だけで撮った写真の一枚では、彼女の白いドレスは平らでベチャンコになっていた。糊が固まって身体は前に傾いているが、つまずいて転びそうになった。まるで、背中を紙板で支えられている西洋のお人形さんのようであった。大陸と一緒に撮った写真は、ペールをおろして顔を履っていた。顔つきそのものはぼんやりしている。写真は、まるである冤罪鬼の影が無意識のうちに入ってきたかのようであった。玉清は非常に不満であった。あとでもう一度ドレスを借りて、撮り直そうと決めた。

昼食の後、囂伯は、自ら国際問題について議論しはじめた。風曇変色まで言及すると、立ち上がり、手を振りかざしたり、テーブルを叩いたりした。妾夫人と嫁の母とは、嫁と並んで靴下を見ながら、ソファーに座っていた。静かに自分の両足を伸ばして、薄紫色の膝の下まで巻いた。その後、みな誰も話を聞いてはいなくて、ただ結婚写真を回し、時々頭を横にしてあくびをしているのに彼女は気がついた。妾夫人は、突然、ある種の嫌悪を感じた。それが、自分の夫に対する嫌悪なのか、それとも、まわりの人々で彼ら夫婦を見ている人たちへの嫌悪なのかはよく分からなかった。

嫁の母はタバコを吸うので、妾夫人は手を伸ばしてマチを取った。正午の太陽が、ガラステーブルの上に照り、ガラスの下に挟んでいるバラ色の金の靴面が光っていて眩しかった。妾夫人の心と手はその光の上でちょっと停留をした。

突然、自分が小さな時、入口のところで近所の人が嫁を迎えているのを見ていたことを思い出した。花轎（婚礼に新婦を乗せる飾りつけた輿）の前のウリウリ、曲がりくねっていて、洗練されてはいない吹奏楽器と打楽器の演奏が、新婦の泣き声を掻き消してしまっていた。銅鑼の敲击音には心が震えた。烈日の下で、花轎の色彩の穂は、湖緑が一行、ピ

ンクが一行、真赤が一行、一行一行あり、自分は自身で揺れ動いていて、人の頭もぼうっとなった。まだ、正午のようにはっきりしている。まるで端午節の雄黄酒である。車夫は刺繍の衣服（中国式の裏付きの上着）の下から、修繕した藍色の短いズボンを露出していた。その上に、黄色い細い首を伸ばしている。たくさんの汗がきらきらして透明であった。まるで壺の中から這い出てきた肉虫のようだった。車夫と吹鼓手（旧式の婚礼・葬儀の際に呼ばれる楽手、楽士）は行列になって歩いた。途中は華美な揺れである。騒ぎを見る人々と彼らとが一体となって、みなともに彼らの外にある種の広大な喜びを震動させた。心の中に揺れて司るものが何であるのか分からなくなった。

長年経っても、妾夫人はまだその光景を覚えている。自分は結婚したけれども、そしてまた、一番上の息子が結婚したが、彼女は、結婚とはそもそも自分の経験していることとは何か違うような気がした。あの日、彼女が見た結婚式には、一種の一貫した感覚があったが、彼女の息子の慶事には、小さいかけらしか感じられないのである。なぜそうなのかは分からない。

彼女の夫は、突然昼食後の時事検討を中止した。手の肘は暖炉の上にもたれかけていた。視線を斜めにして、嫁を見て、最も立ち居振る舞いが鷹揚としていて、最も科学的で新派である義父であるように、「結婚してどうですか？ 心地よいですか？」と尋ねた。

玉清はちょっと躊躇した。そして、すこぶるおっとりした表情で、「とても素敵ですわ」と応えてから、顔はふっと少し赤みを帯びた。

その部屋の人々全員が笑った。だが、何か心が不安定で笑っていたようでもあった。笑ってよいものかどうかよく分からなかったのである。妾夫人は、ただ単に、夫が冗談を言ったことは知っていたが、そもそもよく聞いてなかったのもっとも大きな声で笑った。

了